



# 廣瀬川

第96号

令和元年  
8月30日

## 仙台市小学校長会

発行者／今野 孝一（会長） 責任者／近澤 裕子（広報部長）

### 主張

## 変化に柔軟に対応し、 互いに高め合う校長会 ～子供たちの命と心を守り育む教育に向けて～

会長 今野 孝一（上杉山通小学校）



東日本大震災から8年半が経過した。女川町の校長として津波による甚大なる被害を目の当たりにした私は、「復興には少なくとも10年はかかる」と思ったのを今でも覚えている。被災地域では、かさ上げ工事や集団移転が行われ、学校の統廃合も進んだが、いまだ復興半ばの地域も多い。

あの時我々校長は、学校で子供たち、地域の方々、職員を守ろうと必死に判断し、行動した。「目の前の子供たちの命を地震や津波からどう守るのか」「避難されて来た地域の皆さんをどう守るのか」、これまでの経験と知識を総動員して、その状況、その瞬間で決断した。子供たちの「命と心を守ること」は、学校経営の神髄である。校長として判断に迷う時には、震災時を思い出し、常に「子供たちの命と心のためになるのか」を考え、その本質を見極め、優先順位を決めて対応するようになった。震災時の生死を分けた経験が、校長としての判断のよりどころになっている。

全国各地で自然災害が続いている。仙台市校長会としては、震災時に皆様からいただいた励ましの言葉や支援を忘れず、微力ながらではあるがこれからも恩返しを続けてまいりたい。

本市では、震災以降いじめの問題が多く発生し、いじめを起こさない学校づくり、早期発見、早期解決に向けた学校経営が求められている。保護者の願

いは、いじめや事件事故のない安全で安心できる学校で、子供たちが伸び伸びと学習や生活することである。そのために校長は、自らが率先して子供たちの人権と安全を守るとともに、リーダーシップを遺憾なく発揮し、職員にその大切さを伝え続けなければならない。

しかし、学校の置かれている状況は、年々厳しさを増し、いじめの問題をはじめ、児童虐待など様々な課題を抱え、校長として難しい判断を迫られることも少なくない。昨年度、仙台市教育委員会により「仙台スクールロイヤー事業」が開始され、学校が直面する課題への対応について、弁護士の先生から法律を踏まえた適切な助言や指導をいただけるようになった。子供たちの命と心を守る上で、大変心強い限りである。

仙台市小学校長会としては、これまで営々と築き上げられてきた凝集性を高め、これからも豊かな人間力を結集する共助の精神を生かす「不易」の部分大切にしながら、来年度からの新学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントやSociety5.0やAIの時代を生き抜いていく子供たちに必要な力の育成、さまざまなリスク・マネジメントへの対応など「変化＝流行」にも柔軟に対応していくことができる校長として、志を高く掲げ、互いに高め合っていきたい。

### 内 容

|                   |   |
|-------------------|---|
| ○主 張              | 1 |
| ○特集「国語科東北大会に向けて」  | 2 |
| ○提言「復興に向けた創意ある教育」 | 3 |
| ○学区紹介「地域とともに」     | 4 |

|                |    |
|----------------|----|
| ○特色ある教育活動      | 7  |
| ○仙台市小学校教育研究会より | 11 |
| ○退会者からのメッセージ   | 12 |
| ○新任校長所感        | 21 |
| ○編集後記          | 24 |

## 特集

## 国語科東北大会に向けて

小石 俊聡（八幡小学校）

## 1 ある授業の風景

グループ学習が、行われていた。

子供たちはそれぞれが、ノートを手に話し合いをしている。どのグループも活発そうに見えるのだが、よく見ると……。

司会（または話すのが得意な子）がグループを仕切り、一見活発そうに見えるだけで、黙っている子は、ほとんど黙っているのである。

私はこれまで何度も、ペア学習やグループ学習を取り入れた授業を見てきた。

その多くは、例えば「隣の人と話し合って」という指示が出たから活動しているとしか思えない、子供の姿があったのを覚えている。

ペア学習やグループ学習のよさは、単に「少人数であれば、自分の考えを言いやすい」という理由だけではないはずだ。これだけなら、1年間同じことを繰り返す愚かさを、私たちは自覚しなければならない。なぜならそこには、集団としての質の高まりがないのだから。

ただし、ペア学習やグループ学習そのものが、悪いのではない。学び合う姿を具現化するには、実に有効な手立てだと思う。要は、型をなぞるだけでは駄目だということである。

「主体的・対話的で深い学び」という視点からの授業改善が求められている今だからこそ、子供たちにとって「もっと知りたい。もっと学びたい。」と思える授業の姿を、私たちは明らかにしていかなければならない。

そして、知識伝達型の授業から脱却し、子供が主体となる授業の構築を、目指す必要があるのではないだろうか。

## 2 宮城大会が目指すもの

教師の力量が、ますます問われる時代である。私たち教師は、何を大切にすべきなのか。

私は、大村はま先生の「子どもがそのとき、興味を持つべきことに興味を持つように連れて行く、指導する、それが教師だと思います。」（注）という言葉思い出す。

主体的という名の下に、子供の興味・関心に任せないということだ。しかし子供は、自分が興味を持ったことを学んでいると思っている。この授業で、またはこの単元で何を学ばせるのか。どんな言葉の力を身に付けさせるのか。それを、子供に押しつけるのではなく、さも子供自身が決めているかのように教え導く。

それが、教師としての腕の見せ所だと、大村先生は、述べている。

第65回東北地区国語教育研究協議会宮城大会は、「深い学びを目指す国語科授業の創造」を大会主題に掲げ、2日間に渡って開催される。

そして、今回の大会では、先の大村はま先生の言葉が意味する「教師としての腕の見せ所」を具現化すべく、授業づくりや、発表の準備を進めているところである。

また、目新しい指導法や型を提案するのではなく、これまで私たちが学び育んできた従来の指導法に、もう一度光を当てたいとも考えている。

第1日目の授業公開では、八幡小学校を会場に、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化」の各領域から計11の授業と、東北各県20人の実践発表を行う。

第2日目には、太白区文化センター（楽楽楽ホール）を会場に、講師としてテレビ等でも大活躍されている、俳人の夏井いつき先生をお呼びして、講演会を行う。

演題は「句会ライブ&国語教育に望むこと（仮）」である。ただ話を聞くのではなく、実際に参加者全員が俳句作りに挑戦し、それを夏井先生に評価していただく。そして最後には、その日のグランプリを決定するという、全員参加型の講演会を予定している。詳しくは8月に出る第二次案内をご覧ください。

宮城大会が、言葉の力を身に付けさせるために、日々努力をしている多くの先生方にとって、学びを深められる大会となれば、幸いである。

（注）大村はま著『灯し続けることば』（小学館・P77）

**提言**

復興に向けた創意ある教育

未曾有の大震災から 8 年が経過した。低学年は震災後に生まれ、中学年以上でも当時の様子を覚えていない児童がほとんどである。ましてや、長命ヶ丘地域は大きな被害がなかったことから、「震災を忘れない」という取組は難しい状況である。

そこで、2 つの取組を行うことで復興を目指してきた。

**1 震災の事実を学ぶ**

長命ヶ丘地区では、毎年 6 月最終土曜日に地域防災訓練を実施している。中学校は以前から参加していたが、3 年前から小学校も授業日として訓練に参加している。地域の訓練に参加することこそが、震災の事実を学び防災・減災意識を持つ近道と考えたからである。また、訓練の合間に授業を設定して、保護者に参観していただくことで、防災意識を持ってもらうように工夫している。

今後は、高学年中心に中学生と共に、地域の一員としてできる共助は何かを学び、実践できる力を付けることが必要である。

**地域を元気に ～私たちにできること～**

第 2 地区会長 板橋 高広（長命ヶ丘小学校）

**2 私たちができることを実践する**

「復興」は「福興」、つまり「しあわせ興し」だと考えている。子供たちは、地域の皆さんに笑顔を届け、元気になってもらうことが「復興」につながると考えた。

そこで、高学年有志により結成されたのが「長命ヶ丘に笑顔をとどけ隊」である。地域行事の 1 コーナーをもらい、イベントを開催して地域に笑顔を届け元気づけている。昨年の夏祭りではバザーを行い、恵まれない子供たちのために募金をするなど、様々な活動を 5 回ほど実践した。一小一中の強みを生かし、小中合同での活動も見られるようになってきたことが、大きな成果でもあると思われる。

「東日本大震災から 9 年がたちました。当時の記憶も少しずつ薄れていっています。私たちにできることは、地域でできることを実践して、笑顔や元気を増やすこと、困っている人がいたらちゅうちょせずに助けてあげることではないかと思っています。」今年も、卒業式で子供たちに伝える責務を感じている。

**提言**

復興に向けた創意ある教育

今年も防災リュックを背負って子供たちが登校し地域合同防災訓練が始まりました。防災対応力向上の一環として例年 6 月に実施しているこの訓練は、二つの連合町内会が一緒に行う行事の一つです。

地域合同防災訓練に向ける地域の方々の意気込みは絶大です。次代を担う小学生を持つ保護者に、「地域がやっていること」「避難所運営」について知ってほしいという願いを強く持っているからです。しかし、小学生の登校日にもかかわらず防災訓練の開会行事に参加する保護者が少なく、地域の役員さんたちも残念に思っており、平成 29 年度の秋から内容の見直しを行い、平成 30 年度から今の内容で実施しています。

地域合同防災訓練の内容の見直しに向け、校長として大切にしてきたことは次のとおりです。

**1 関係各所が実施目的を明確にして臨む**

- ①地域 次代を担う保護者に地域の動きを知らせる
- ②保護者 地域と一緒に見学・体験をする中で地区班の一員としての意識を高め顔の見える関係性を構築する
- ③学校 防災リュックで登校することを通して家族

**地域をつなぐために学校ができること**

第 4 地区会長 伊藤 敏子（北六番丁小学校）

で防災について考えてもらう機会とする

**2 学校がコーディネート力を発揮する**

- ・担当課や市民センターなどの連絡・調整
- ・開会行事が盛り上がるようなゲストの招聘

**3 担当課や市民センターの力を生かす**

- ・市民センターに避難所運営の仕事分担等を掲載したリーフレット作成を依頼する
- ・担当課に電話体験コーナー設置を依頼する

当日は、開会行事に防災士である阿部清人さんによる「防災エンスショー」で、会場に集まった約 900 人の大歓声が体育館に響き渡りました。地域が望んでいた一体感が感じられ、参加者はそれぞれ喜びを感じていたようです。

地域合同防災訓練の今の内容は、2 年後には社会情勢を受けて見直しを図る予定です。

震災の風化が危惧される今だからこそ「地域と合同で防災訓練を行うことが子供たちだけでなく保護者の世代の防災意識を高めることにつながる」ことを意識して、これからも地域をつなぐために学校ができることを考えていきたいと思います。



**提言**

復興に向けた創意ある教育

**持続可能な社会の構築を目指して**

第6地区会長 永井 一也（南小泉小学校）

本校では、平成29年度エネルギー環境教育モデル校の認定を経済産業省資源エネルギー庁から2年間受け、そして今年度、12月にエネルギー環境教育を主にした自主公開を行う予定になっています。

東日本大震災の時には、ほとんどの地域が停電し、改めてエネルギーの大切さを実感したと思います。人工呼吸器を付けた私の教え子は、電源が消失し、ご両親や多くの友人が電源を求めて奔走したそうです。結果的には消防署の助けを借りて事なきを得たということでした。

エネルギー環境教育のねらいは「持続可能な社会の構築をめざし、エネルギー・環境問題の解決に向け、生涯を通じて主体的かつ適切に判断し行動できる人間を育成する」ことにあります。エネルギーの知識を得ることは、ねらいではありません。エネルギーや環境問題を題材にして、主体的かつ適切に判断し、行動できる人間を育成することが重要だと考えます。

エネルギーの課題は、例えば「エネルギー自給率」「エネルギー資源の枯渇」「二酸化炭素の排出量」な

どがあります。その解決方法は「エネルギー源の多様化」「ゼロ・エミッション電源の普及・開発」「省エネルギー」「革新的な技術の開発」「ライフスタイルの変換」などがあげられます。どの答えも正解と言えますが、どの答えもそれだけでは解決することはできません。でも、子供たちが学び・考え・導き出した答えの全てを肯定することができます。教師も考えながら子供たちと共に学ぶことができます。子供たちの自己肯定感・自己有用感を育てるのには最適な素材の一つと言えるのではないのでしょうか。

エネルギーがなくては今の生活は成り立ちません。東日本大震災を経て、様々なエネルギーに関する課題が改めて明らかとなりました。

持続可能な社会の構築を目指して、発達の段階に応じ、子供たちが今、エネルギーのことを自分なりに考えることはとても重要で有意義だと考えます。本校ではエネルギー環境教育を校内研究とし、子供たちと共に学んでいます。

**学区紹介 地域とともに****Akiuに育ち Akiuに学び**

伊藤 公一（秋保小学校）

本校は明治6年開校。戦前には集団疎開児童を加えて児童数1300名、32学級だったときもある。戦後、町制施行により名取郡秋保町立秋保小学校になり、昭和63年3月、秋保町と仙台市が合併し、今の仙台市立秋保小学校になった。今年度合併して31年目になり、児童数は45名の小規模校であるが、校歌は、土井晩翠先生作詞の伝統校である。

秋保地区は仙台市の南西部にあり、面積は太白区の62%を占める。秋保温泉から約6キロ西の秋保地区の中心に位置しているため、秋保総合支所や秋保市民センターなどの公共施設等が多い。今年は二口街道の全面舗装がなされ、仙台と山形を結ぶ。

本校では、1年間を通して「5」の付く日に保護者・地域・学校そして交通指導隊の方々が校門の前で交通安全指導と挨拶運動を展開している。毎月5日には児童の縦割班も加わり、挨拶を通して、人と人とのつながりや地域との連帯感を深めている。

秋保地区では、平成23年度より5年間「秋保中学校区における学びの連携モデル事業」の指定を受け、幼小中の連携を深めながら、教員の意識や授業力の向上を図り、園児児童生徒の社会的・職業的自立を図ることをねらいに取り組んできた。地域総ぐるみで幼児児童生徒の成長を支える実践を積み重ねてきた。

モデル事業終了後も、この学びの連携は続いている。今年度は秋保中学校区12年間で育む子供像を「Akiuに育ちAkiuに学びたくましく生きる子供の育成」として取り組んでいる。特に、地域連携の中核をなす地域教育協議会では、総合支所、市民センター、秋保教育文化振興会、温泉組合、警察、学校関係者が集まり、秋保地区にある教育・学習資源（自然、伝統文化など）を有効活用し、家庭・学校・地域・関係諸機関の連携、融合を目的として事業を展開している。

多様で豊富な経験を持つ地域住民や関係諸機関が教育活動に関わることによって、子供の地域への帰属意識や規範意識、コミュニケーション能力の向上を図っている。



## 学区紹介 地域とともに

地域の期待に応える  
学校目指して

船山 雅和 (高森東小学校)

本校は、隣接する高森小の児童数増加に伴い、平成3年度に分離し117番目の高森東小学校として開校した。昭和48年独立複合都市を目指して開発された「泉パークタウン」の中央部に位置し、緑豊かな自然に恵まれた地域である。地域の住民は、市内外はもとより、全国各地からの転入者が多く、「新しいふるさと」としての地域づくりに意欲的で学校に対する期待は大きく、また協力的である。一時は800人を超える児童数も現在は315人となり、学級数は、各学年2学級、特別支援学級1学級の構成となっている。

現在の学区の様子を見ていると、「新しいふるさと」の中心となっているのは、六つの町内会と高森市民センター、そして小中学校の三つの役割が大きい。そして各団体の行事は文化・スポーツ・教育のみならず防災・防犯・福祉・健全育成など無理なく行われ、地域の絆づくりが進められている。そこでは、市民参加型の参加者により、伝統などにとらわれない新しい街づくりが進められている。

中でも特に目立つのはボランティア活動である。本校でも小1サポーターをはじめ読み聞かせ、野鳥観察（自然環境）、防犯（児童みまもり隊）、学校行事ボランティア（運動会、除草、学芸会等）は、学校支援地域本部事業の母体となって活動していただいております。本校の教育活動の大きな支えとなっている。しかも地域の方々はこの活動を通して、関係づくりをしているところもあり、「私たちも子供たちから元気をもらい楽しんでいます。」と感想をいただくことも少なくない。

校長として、この関係を更に良いものと発展させていくために、改めて、子供たちにこの地域の方々に支えていただいている感謝の気持ちを持たせ、しっかりとした学びの基礎・基本の習得をしていかなければならない。連携・交流ありきではなく、まずは一人一人の児童にこれからの厳しい時代に対応できる力を育むことが責務である。「学校だけの力では十分ではない。」と話すことがあるが、子供の成長には、保護者や地域のみでも十分ではない。お互いが役割を十分に果たして協働する形が最善である。学校はやはり一つ一つの授業が大事と考えている。

## 学区紹介 地域とともに

「希望の丘 向陽台」の  
一員として

熊谷 裕行 (向陽台小学校)

「子供たちに挨拶されるようになって、元気が出ましたよ。」地域で見守り活動をしてくださっている町内会の組織「お散歩隊」の方からいただいたうれしい一言です。向陽台団地の造成を機に開校した本校も46年目を迎えました。

団地の造成工事が始まった当時、橋本崇雄初代校長のもとに学区の方から手紙が届けられたことが、創立10周年記念誌に書かれています。手紙には「八月末頃（昭48）着工以来急ピッチで、毎日毎日、雨の日も、風の日も、時には夜中又朝までも建設の音が響いて参りました。……」と綴られ、それをお読みになった橋本校長は「学校建築の騒音を建設の音と受け止めておられる。どんなにかこの学校の建つのを心待ちにしておられたかをしみじみと考えさせられました。」と回想されています。更には、工事の挨拶回りで出産後すぐの奥様がいらっしゃる御家庭を訪問されたとき、そのお宅のお祖母様から「私は孫を将来

いろんな事に出会っても負けない人間に育てたい。工事の騒音くらい大丈夫ですよ。」とお話いただき、この学校を「自分の学校」として捉えてくださっていることへの感謝の意が記されていました。

46年の年月を経て「あったか言葉」と「きらきら行動」を協働型学校評価重点目標に掲げ、学校・保護者・地域の皆様と共に「私たちの学校」という意識を高める取組を行っています。地域での挨拶はもちろん、大人も子供もきらきら行動デー、マナーアップデートなど、保護者・地域と連携した取組は、学校評価アンケートに寄せられた「もっと学校に協力したい」という力強い声によって実現しています。

子供たちが地域にお返しできることは限られているかもしれませんが、しかし、少しずつですが、生活科で育てたひまわりの種を地域にお届けするなど、学習活動を通した工夫も見られてきています。

私たちの取組は、まだまだ小さい種です。いつか丘いっぱい大きな花を咲かせ、ひまわりのような笑顔で元気な挨拶があふれる向陽台につながることを願いながら、学区の一員として、地域に貢献できる学校を目指したいと思っています。

## 学区紹介 地域とともに

児童の笑顔で地域を元気にする  
学校を目指して

飯野 正義 (沖野小学校)

沖野小学校は昭和52年に仙台市60番目の小学校として開校した。沖野地区9町内会の住民が、署名運動や市への請願を繰り返して本校の建設に至ったと聞いている。言わば、地域、保護者の皆様に生んで頂いた学校である。開校当時、六郷小、若林小、遠見塚小の三つの母体校から集まった児童は495名。本校校章にデザインされている三つの檜の実(ドングリ)は、この三校から独立した若い芽が生長することを期待してあしらわれたものであり、それを取り囲む9枚の檜の葉は、学校を支える九つの町内会の結束を表している。このような開校の経緯を顧みても地域との繋がりが深い学校と伺い知ることができる。



本校は伝統的にPTA活動が盛んで、いくつか特徴的な活動が脈々と受け継がれている。その一つが、昭和62年に開校10周年を記念してPTAより寄贈さ

れた「愛のチャイム」である。屋上に設置されているこのチャイムは、毎日夕方になると沖野の街に「夕焼け小焼け」のメロディを流し、子供たちに帰宅の時間を知らせている。また、この「愛のチャイム」が流れる時間帯に合わせて保護者が「夕焼けタイム」と称して、見回り活動をしてくださっているのも本校独自の活動と言えよう。

学校の近隣は商店も多く食品工場もあり、生活科や社会科の学習にはうってつけである。毎年、多くの子供たちが訪問するのだが、本当に細やかに対応して頂いており、沖野地区の温かさを感じている。

近隣校と共に取り組んでいる『沖野学園』では授業公開や講演会の実施にとどまらず、地域の方を講師に招いた学びのスクール、三校PTA交流会等も実施しており、地域、保護者の皆様を巻き込んだ大きな取組となっている。

地域に育んで頂いた学校の使命として、今後も児童の笑顔で地域を元気にする学校づくりに励んでいきたい。



## 学区紹介 地域とともに

## 学校・地域・家庭との連携

相澤 文典 (袋原小学校)

袋原小学校は、昭和51年4月に中田小と四郎丸小から分離新設された学校です。今年度から四郎丸小の建て替え工事に伴い、一部学区が変更になり、全校児童が897名と減少しました。令和4年度の工事完了後は700名程度になる予定です。

本校の地域は、子供たちをバックアップする体制が驚くほどしっかりしており、防犯ボランティアの登録者数は216名にのぼり、登下校の際には数多くの防犯スタッフに子供たちの安全を見守ってもらっています。また、非常時の支援も厚く5月に行われた学校単独の運動会では、全国的にも暑さ対策が問題になったため、前日に地域の方々に相談しました。すると、休憩用としてすぐに各町内会のテント9張りが用意され、さらに設営から撤去まで行っていました。また連合町内会では、「子どもフェスティバル」「動物ふれあいまつり」「昔遊びフェスティバル」「中央公園イルミネーション」等、い

ろいろな行事を子供たちのために実施していただいています。

こうした地域の強い協力は、校長にとって非常に心強く、安心して学校経営ができることにつながっています。コミュニティスクールの情報が多く聞かれるようになりましたが、今後さらにこの地域との協力体制を強め、発展させていくために学校は何かできるのか、校長は何をしなくてはならないのか……。まだ明確な答えはありませんが、まずは、多くの支援を受けている学校の子供たちがどのような勉強をし、生活しているのか、どんなことを考え、思っているのかをしっかりと地域に情報発信することが重要であると考えています。また、地域を支える若い世代としてPTAがあります。子供たちがこれだけ多くの地域の方々に支えられ、守られているということを各家庭の保護者に伝えることも校長の大きな務めだと思います。

今後も学校・地域・家庭の連携がより一層深められるように、校長として全力で取り組んでいきたいと思っています。

## 特色ある教育活動

# 豊かな自然と 関わり合う人々に感謝して ～地域と歩む子供たち～

堤 由美（上愛子小学校）

## 1 本校について

本校は仙台市西部に位置し、今年度で開校140周年を迎えます。昭和30年代後半のピーク時には約380名在籍していた児童も、今年度は72名となり、その多くがスクールバスや路線バスを利用して登下校しています。学校の周りには自然森が広がり、北側には広瀬川が流れ、子供たちが伸び伸びと育つ環境にあります。

保護者や地域の方々は、学校の教育活動にとても協力的で、これまでも長年に渡り様々な行事に積極的な支援をいただいています。

明るく素直な子供たちが、豊かな環境の中での学びを通し、故郷のよさを感じながら学校生活を送っています。

## 2 特色ある教育活動

### (1) 「ゆうゆうの森」における活動

学校の東側に広がる「ゆうゆうの森」は、遊歩道や東屋の設置など、保護者や地域の方々の力で整備されてきた森です。5・6年の子供たちは、毎年「緑を守り育てる宮城県連絡会議」の方々から森の植物や昆虫について学ぶ機会となっています。

毎年7月に行われるPTA主催の「学校キャンプ」では、樹名板や鳥の巣箱などを子供たちが手作りし、森の豊かさを知り、親しむ活動を行っています。

また、子供たちが土に触れる機会も数多くあり、たてわりグループでサツマイモの苗植えや収穫などに取り組んでいます。こうした縦割り活動を通じた学びで体験する異なる学年の子供たちの関わりは、相手を思いやる心の育成につながっています。

### (2) 地域の方々の支援

学校の近くにある学習田では、「田んぼの先生」と呼ばれる地域の方々から支援をいただいています。子供たちは、昔ながらの田植えや稲刈りの方法を教わり、体験する貴重な機会となっています。

児童会行事の「りんどっこ祭」にお世話になった地域の方々をお招きして、育てた餅米で作った餅を振る舞い日々の感謝を伝えることで、子供た

ちは、地域の方々と関わることのよさを体感する場となっています。

### (3) 「交流学习事業」を通して

本校では、平成25年度より作並小及び大倉小との交流学习事業を行ってきました。この事業は、小規模校の課題である、より多くの仲間と関わり学び合う機会を設けるために仙台市教育委員会が進めてきました。昨年度から、3校の全児童による交流学习も始まり、本校を会場に実施しています。

今年度の学習は5月に行われ、各校の児童会が中心となって学校紹介を行い、アイスブレイクタイムを通して和やかな雰囲気となりました。その後、各学年等に分かれて、普段に比べてより多くの人数の中で、いろいろな考えを聞いたり活動したりすることを通して学びを深めていました。高学年では音楽の音の響きや重なりを感じたりする学習に取り組み、緊張しながらも普段はできない体験をする機会となりました。

## 3 まとめ

本校の子供たちのよさは、素直で相手を思いやる優しい心を持つところであると感じています。上級生が下学年の面倒をしっかりと見る姿が、普段の学校生活の当たり前の風景となっています。

しかしながら、それは小規模校にありがちな固定的な集団の中でのことであり、より多くの人たちと触れ合う機会を数多く設け、様々な体験を通していくことは、中学校やその先の学びにつながる心を育むために、とても大切なことであると考えます。

これまで交流学习で一緒に学ぶ機会を持っていた作並小・大倉小と本校の3校が令和2年4月に統合することが決まり、今年度はより多くの交流学习を実施し、子供たちの心の準備を進めていきます。3校の統合は仙台市で初めてとなり、各校の歴史と伝統文化の継承や、学区の広域化に伴う通学時の安全確保や防災面での対応など様々な課題がありますが、それらをひとつずつ解決しながら、より豊かな学びを子供たちが実感できるような新上愛子小学校を目指し、学校経営を進めてまいります。



## 特色ある教育活動

## 年間150日の交流学習

加茂 伸一（実沢小学校）

## 1 はじめに

本校は明治 5 年の学制頒布を受け、明治 6 年に開校した上谷刈小学校に始まり、明治13年に分離独立し現在に至っている。

本校の学区は、泉ヶ岳の南東方向に位置し、広く田畑が広がる農業を主軸とした地域で、住民は本校の卒業生が多く、非常に協力的で学校に対する強い愛情を感じる地域である。

## 2 本校の教育活動

今年度本校では、4月から12月まで隣接する根白石小学校（以後根小と表記）との交流学習を行っている。根小児童の登校に合わせて根小に登校し、根小児童の下校に合わせて本校に戻るという毎日である。本校実沢小学校（以後実小と表記）の児童数減少に伴い、校内だけでの指導では求められる教育の目的を十分に達成できないことが予測される状況となり、実施に至った。詳細は以下のとおりである。

## (1) 交流学習の目的

児童数減少により、コミュニケーション能力の向上など他者との関わりの中で学ぶことが難しくなった部分の解消を目指すための活動であり、以下の目標を設定した。

- ①同世代の児童と交流を図り、心身の健全な成長を促す。
- ②より多くの児童との学び合いにより、異なった思考や判断及び価値観への理解や対応力を育む。
- ③異学年交流の促進により上下の人間関係を理解し、よりよい人間関係構築の能力を育む。
- ④様々な活動に参加することで、経験の幅を広げ集団の一員としての自覚と責任を育む。

## (2) 交流学習の概要

## ①交流の内容について

- ・4月から12月までは根小の日程に合わせ、根小児童の登校から下校までを共に活動する。  
1月から3月は実小で活動する。
- ・教育課程に関わるものは、根小で活動する期間は根小の計画に従い、根小児童と一緒に学

習する。実小での活動期間については本校が作成する計画により活動する。

## ②移動について

- ・移動はタクシーとし、実小集合・解散とする。
- ・集合時刻は、根小の活動開始時刻に間に合う時刻（午前8時）に設定し、全児童が一斉に根小に移動する。
- ・帰校は、児童が活動を終えた後一斉または学年ごとに実小に帰校し、その後下校とする。

## (3) これまでの経緯

本校では館小学校の分離（昭和63年度）以降、在籍児童数の減少が続いた。これまで教育委員会より、保護者、地域に対して、学校の一定規模確保に向けた仙台市の方針説明等が行われてきた経緯はあったが、平成30年度までは大きな変化は見られなかった。しかし平成31年度を迎えるにあたり、在籍児童数が大きく減少することが見込まれる状況となり、今後の学習環境に対する不安から転校を考える児童・保護者が見られるようになった。こうした状況に、保護者、教育委員会、地域での協議が行われ、1月末に教育委員会から提案されたのが、隣接する根小との交流学習の拡大であった。

## 3 現状と課題

拡大された交流学習のおかげで、子供たちは、これまでになかった人数の中で、新しい友達をつくり、大勢の人と話し合う活動を経験し、充実した日々を送っている。保護者からも、子供たちが日々楽しく過ごしていること、これまであまり見られなかった競争意識が生まれてきていることなどの高い評価をいただいている。

現時点で来年度以降の交流学習の詳細についてお伝えできないが、今後も子供たちが安心して楽しい学校生活が送れる望ましい交流学習の在り方を考えたい。

**特色ある教育活動****人とのかかわりを大切に笑顔あふれる楽しい学校を目指して**

鎌田 孝悦 (鶴が丘小学校)

**1 はじめに**

本校は、昭和57年に松森小学校から分離し、開校38年を迎えました。「県民の森」に隣接した鶴が丘団地の東端に位置し、蔵王連峰や泉ヶ岳を一望でき、小鳥のさえずりが教室に聞こえるという自然環境にも恵まれています。団地の発展に伴い児童数887名、24学級という年もありました。その後、減少し続けましたが、5年前から増加し、本年度は293名、13学級となっています。開校以来地域の方々の学校に対する支援はすばらしく、地域とともに歩んできた学校といえます。

**2 特色ある教育活動****(1) たてわり活動 (あおぞらタイム)**

月1回、たてわりグループごとに6年生が中心となって内容を企画し活動しています。リーダーの6年生は下級生の要望を聞きながら、毎回誰もが楽しめる活動を考えています。普段の生活の間でも上級生が下級生のお世話をしている姿が見られます。

**(2) あおぞらまつり (児童会行事)**

3年生以上が学級毎に2店(催し)を出して全校で楽しく活動しています。昨年は、迷路、ライブハウス、たからさがし、スポーツ屋台など16コーナーを前半・後半に分けて店番と客と交代して回りました。どのコーナーも工夫を凝らして自主的に運営する姿が見られました。

**(3) 全校たてわり遠足**

毎年9月下旬に、全校たてわり遠足を実施しています。開校以来続く伝統行事です。学校から隣接する「県民の森」までグ



ループごとに上学年の児童と下学年の児童がペアとなり下学年の速さに合わせて歩きます。県民の森のアスレチックでも互いに声を掛け合いながら

チャレンジしたり、グループ毎にゲームをしたりと楽しく活動しています。昼食時も話をしながら一緒に食べるなど普段の学校とは違った姿が見られます。

**(4) 自然観察園の活用**

自然観察園は開校当時、130名を超える父母教師会の皆様と地域ボランティアの協力で造成された施設です。子供たちが自然を身近に感じられるよう橋や川、道に名前をつけ、高山植物を自由に観察できます。総合的な学習の時間や理科の授業で活用したり、休み時間に探検したりして児童の憩いの場になっていました。東日本大震



災の影響で倒木などがあり一時立ち入り禁止となりましたが、平成28年に階段や手すり、橋などをたくさんの方々の協力により再整備されリニューアルオープンしました。約5000㎡の広さがある森の中では、リスやキツツキなどの生き物や、ミズバショウやカタクリなどの様々な草花に出会うことができます。また、低・中学年は生活科や図工の学習で地域のボランティアの方を招き、森に落ちていたり、剪定で出たりした木の実や枝を利用して工作の活動も行っています。

**3 おわりに**

豊かな自然に恵まれた環境の中、自然観察園で生き物や草木に触れる活動を通して命の大切さを学ぶ機会となっています。さらに、「たてわり活動」を中心とした異年齢のふれ合いを通して、互いを理解しようとする心、協力する心、思いやりの心が育っています。今後も地域の方々に愛され、子供たちが笑顔で毎日を過ごせる楽しい学校づくりに努めていきたいと思っています。

**特色ある教育活動**

# キーワードは「ともに」

伊藤 雅亮（鹿野小学校）

## 1 はじめに

本学区は、南側に長町の商業の中心街を控え、北側には今も緑豊かな台地が広がっている。そのような恵まれた地域に鹿野小学校はある。近くには世界的大発見の富沢旧石器時代の遺跡や弥生時代の水田跡などがあり、この地域では太古から人々が生活を営んでいた。そのため、鹿野の地名とゆかりの深い鹿除土手や一塚古墳、木流し堀など、数多くの史跡が見られる。保護者や地域住民の学校に対する関心は高く、特に、学校を大切にしようとする思いは、開校時から現在まで綿々と続いている。開校の年、地域の方々が持ち寄り植えてくださった樹木は、60年が過ぎた今では大きく枝を伸ばし、緑の葉を広げ、子供たちに憩いと安らぎを与えてくれている。PTA、鹿野学区体育振興会、施設開放管理運営委員会、鹿野学区教育振興連絡協議会等諸団体の活動も充実しており、これら諸団体との連携による各種事業が行われている。このような本校の教育の特色について三つに絞って紹介する。

## 2 地域とともに

5月下旬に行われる運動会は、学区民運動会で、体育振興会との共催である。教員の指導による児童参加の学校種目と地域の団結と親睦をねらいにした地域種目が交互に行われる。準備や後片付けはPTAや親兄の会の協力も得られる。

また、10月の地域の防災訓練では、避難所運営委員会が中心となって土曜日に行くが、学校は、避難訓練を取り入れながら、児童の登校日として防災に関わるたてわりでの授業を行い、地域全員が防災意識を高める訓練となっている。

毎週木曜日の朝は、読み聞かせタイムとなっている。読み聞かせてくださるのは、地域の読み聞かせボランティアの皆さんで、児童は毎週とても楽しみにしている。

さらに、4学年の総合的な学習の時間と音楽科では、和太鼓演奏の学習を取り入れている。その学習には、地域伝統の和太鼓演奏を引き継いでいる方を講師に招いている。学習の成果は学習発表会で披露されている。

## 3 中学校区の学校間連携

中学校区の学校やPTA同士の連携が盛んで、いくつかの事業が行われている。

まず、本校児童と中学生との交流学习がある。これは、地域の防災訓練に合わせて、児童への防災教育の一環として行っている。中学生が、児童に出された「タオルやビニルを使った応急処置の方法」などといった防災に関する課題について児童に教えるという形態で行っている。

また、「長町プロジェクト」という長町中学校が中心となった「復興のための」事業があり、本校児童も被災地訪問や花壇整備活動に中学生と共に加わっている。

さらに、「長町まなびネット」という太白区中央市民センターが核となった事業があり、中学校区の三つの学校の小学生が学校の垣根を越えて、夏季休業中に防災や地域についての学習を行っている。

## 4 通級指導教室を活用して

本校には「はぐくみ教室」と呼ばれている通常学級で学ぶ児童のためのLD等の通級指導教室が設置されている。本校での指導としては、通常学級と通級指導教室の両方からの指導での相乗効果を狙って「相互アプローチ」という考え方で可能な限り指導を行っている。

例えば、通級指導教室で学んだソーシャルスキルを通常学級の中でそのスキルを使う場面を設定してもらったり、通常学級での漢字の読み書き練習の前に通級指導教室で、同じ漢字を使って読み書きの認知に関する学習訓練を行ったりするというアプローチである。

通級指導教室には、校内だけではなく他校からの通級児童もいるので、他校との連携も今後強化していきたいと考えている。

## 5 おわりに

以上のように、本校の教育活動の特色をまとめてみると、キーワードとして「ともに」という言葉が思い浮かぶ。学校単独や、学級単独での教育活動ではなく、お互いに「ともに」活動に取り組むことが本校の基軸なのだと実感する。今後も「ともに」をキーワードに教育活動を積み上げていきたい。



## 仙台市小学校教育研究会より

## 仙小教研の充実発展に向けて

仙台市小学校教育研究会 会長 佐藤 哲郎 (片平丁小学校)

仙小教研の活動は、発足以来一環して「仙台市小学校教育振興のため各部会の連絡提携をもとに、研究活動の推進をはかること」がその目的である。

これまで各部会では、子供の実態をみつめ時代の要請を受けながら、あるいは次の時代を見据えて、研究主題を定め、部会長の校長先生方のリーダーシップのもとで、多くの成果を挙げてきた。改めて諸先輩方の見識の高さと実行力に敬意を表したい。

一方で、さらなる充実発展のために解決すべき課題が出てきたのも事実である。そして、それらの懸案事項を象徴するキーワードの一つがスリム化であると認識している。

## 1 活動のスリム化に向けて

ここでまず、これまでの流れを確認しておきたい。

## (1) スリム化の背景にあるもの

数年前より、仙小教研のスリム化に向けての検討が行われてきたが、いよいよその改革が動きはじめた。背景にある要因として、大きくは

- ・学校多忙化の解消
- ・子供と向き合う時間の確保

の二つが挙げられる。さらには、近年の働き方改革の流れの中で、教職員の過重な勤務実態が社会的な問題にもなってきたことも要因の一つに挙げられる。

## (2) スリム化の動き

このような中、平成29年度からは各部の協力を得て、活動内容の精選や市教委との共催事業の実施、会議の精選や常任委員人数の削減、研究集録のデータ化など、一定の成果を見ることができた。

平成30年度には、研究会の運営等についても議論が重ねられ、本年度からは部会長の選任方法や常任委員依頼方法も見直しを図られ、一歩前進することができた。

## (3) 今後の取組

今年度はこれまでの変更点等の是非を検証しさらに工夫の余地がないかを検討していく予定である。

また、少し長期の視野での改善点の有無についても考えていきたい。

## (4) より実りある活動を目指して

仙小教研はそれぞれの部が運営を工夫しながら、子供たちのために、そして教師自身の指導力の向上に向けて大きく貢献してきた。

この秋には、国語、社会、書写、外国語活動部の四つの部会で東北大会が、また特別支援教育部においては、情緒障害教育の全国大会が開催予定である。各部長の校長先生方を中心に着実に準備が進められ、大きな成果が上げられることが期待される。

## 2 視野を広げ、資質を高める講演会目指して

毎年夏に実施している講演会は、平成26年度に宮城教弘塾と共催になり、平成27年度からは、新規事業「教育文化講演会 in 仙台」とリニューアルされ、仙台市中学校教育研究会と隔年で運営を分担し取り組んできた。

令和最初の今年度は講師に、鎌田 實氏を迎え、「『がんばらない』けど『あきらめない』」をテーマに御講演をいただく予定である。

ともすれば「がんばって」そして「あきらめない」傾向にあると言われる教師にとって、多くの示唆を与えていただけるものと今から楽しみである。様々な研修が行われるなかで、医師そして作家という立場から、我々とは違った視点、角度から世の中を見つめ、数多くの提言を行っている氏のお話を聞けることは、たいへん有意義になるものと確信している。

## おわりに

OJTの必要性、重要性が言われるなか、仙小教研はこれまで、学校間の枠を超えた組織として、仙台市の教育振興に貢献するとともに、互いに学び合い、力量を高める場としても重要な役割を担ってきた。職場内に年齢構成の二極化が生じ、学校文化の継承も危ぶまれるという声が聞かれるなか、仙小教研の各部が果たすべき役割は、ますます大きくなっており、私自身も微力ながら尽力したい。

## 退会者からのメッセージ

## 後輩に期待すること



## 次の備えは大丈夫か

熊本 清孝（前 通町小学校）

栗生小学校校長2年目の卒業式練習中のことであった。

突然、体育館は激しい震動と轟音に包まれた。強く、そして長い時間、地上の全てのものを容赦なく突き上げては繰り返し揺さぶった。東日本大震災の襲来である。卒業式の練習最中で、子供たちを避難させようにも轟音で声がかき消されるほどであった。

この時私は確信した。「これまでずっと警戒してきた大地震とはこれのことだ」と。そして、地震に対する備えとして取り組んできた「家具の転倒・物の落下防止措置」「耐震工事」「食糧の備蓄」「無線機の配備」等が完了し、間に合ったことに感謝した。歴代校長の時代から市教委の指導の下に、着々と備えを進めてきた賜であった。

本震に近いレベルの余震が続き、放送設備も使用不能となると、二次避難の情報が一斉に伝わらない状況にあった。このとき役立ったのは「指示伝達係」である。被害の状況や避難ルートの安全を確認して本部や各担任に伝えたり、避難のタイミングを伝えたりする役割を果たした。実は、東日本大震災の何日前に発生した強い地震によって、放送設備が全く使えなくなったことがあった。その時の教訓を生かして、ハンドマイクを持った指示伝達係の職員を担当ブロックごとに配置していた。これが大いに役立った。

以来、避難訓練は前年度踏襲とせず、想像力を働かせ、条件を変えて様々な状況に備えるようにしてきた。どんな状況でも災害は来る。どのような状況にも対応できるような備えが必要である。

## 校長室と校長

吉田 秀夫（前 片平丁小学校）

校長室は、校長が一人で居るには広い空間ですが、広さを生かしてこそ意味があります。

## ▼意思疎通（コミュニケーション）の場として

学校経営のために、必要な情報を得たり、情報を発信したりすることを積極的かつ意図的に行う場として、校長室は最適です。地域の方々や保護者の皆様、児童、職員等、様々な人と、時には一対一で、時には大勢の人たちとの意思疎通の場として、大いに活用できます。

## ▼決断前の思考の場として

課題が山積する中、校長として重い決断をしなければならない場面があります。校長はある意味孤独で、最後は自分で判断し決断を下さなければなりません。的確な決断ができるようにするためには、ある程度の広さがある静寂な空間で、冷静に思考することが必要です。そのために、校長室があると言っても過言ではありません。

典型的な校長としての「動」と「静」の例をあげましたが、校長室の使い方や機能を考えてみると、校長としての本質的な職務や役割がより明確になると思います。

校長室を上手に活用するとともに、子供たちが「明日も登校したい。」と思える学校をつくることを期待しています。

## 頑張ろう 仙台 私たちの街だから

堤 祐子（前 立町小学校）

校長室の書庫にある『絆そして未来へ』と『とも

に、前へ』の 2 冊の記録誌。手にとって、改めてページを繰ると平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で、仙台市の小学校と中学校の校長先生方が、どのように未曾有の危機的状況に対応していったかという生々しい様子を読み取ることができます。

3 月末をもって定年を迎える今、振り返ってみると、危機管理も含めて学校経営で困難にぶつかった時、諸先輩校長先生方の行動する後ろ姿と励ましの言葉、そして残された記録の重みというものに助けられたことをしみじみと実感しています。

昨今『チーム〜』という表現が目に触れることが多くなりましたが、教育が抱える様々な課題も”強力な校長のリーダーシップ”とともに、『チーム校長会』としての叡智の結集の対応が、問題解決へとつながっていくのではないかと思います。

“子供”“家庭”“地域”“教職員”校長の学校経営の範囲は実に広いです。そのような中でも、同じ志を共有できる校長会で、皆様と同じ時、同じ場を過ごせたことは私の教員人生にとってかけがえのない財産になりました。

『頑張ろう 仙台 私たちの街だから』今後もあの震災後の思いを忘れずに、自分なりに精進して参りたいと思います。長い間、お世話になりました。

## 先達の気概

仲野 繁俊（前 連坊小路小学校）

震災の記憶の中に、校長の気概を感じる忘れられない言葉や振る舞いが残っています。

E 先生は、押し寄せて来る多くの避難者の混乱と不安を、ハンドマイク一つで制していました。

K 先生は、子供たちを一晩かけて避難させてから、泥にまみれた二階の校長室に入り、指導要録を抱え、「車も免許証も流されたけれど、よかった。」とつぶやきました。

S 先生は、「俺はここでいい。」と間借りした中学校の手狭な体育倉庫に、仮設校舎が建つまで、ビバークするように陣取りました。

I 先生は、大きな亀裂の走った校庭と立入不可となった校舎から離れ、子供たちを三カ所に分散して学ばせることを決断しました。何かのお役に立たね

ばと電話を入れると、「大丈夫です。」と穏やかな一言を返してきました。

N 先生は、発災後の春休み、職員と N 小学校を視察し、間借りして入学準備にあたる先生方の支援に動きました。

あの時、大災害だというのに、夜空の星は静かに煌めきを増していました。校長の気概が、困難な状況や、心の痛みを抱えてもなお、守るべきを守ろうとしていた先達の姿勢に輝いて見えます。

気持ち一つです。難局に向き合うしかありません。きっと何とかなるはずです。

結びに、これまでに出会えた皆様様に、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

## 「カランコエ」

津久井 隆之（前 原町小学校）

校長先生方は「カランコエ」を御存知でしょうか。小さな花を沢山咲かせ、種類が豊富で色とりどりの花が魅力的な植物です。

私が「カランコエ」を知ったのは、ちょうど校長になった年の秋頃、花屋さんに行った時に目に留まったのが最初でした。様々な小さな花の色がきれいだと思って思わず鉢を手にして買い、校長室に飾ってたのです。花は次の年の春には終わりましたが、その年の六月頃、挿し木に出来ることを知り、試しに挑戦してみました。鉢の上の方を茎から切り、ペットボトルのコップに挿しておいたら少しずつ根が生えてきました。その後、土に植え替えたところ、葉が大きく成長し、次の年の二月頃からその一つ一つに小さな花が沢山咲いたのです。「カランコエ」の自ら根を張り出し伸びようとする姿。しかし水だけでは大きく育ちません。適切な肥料を与えることで大きく成長し、美しい花を咲かせます。

カランコエの花言葉は、「幸福を告げる」「あなたを守る」「おおらかな心」「沢山の小さな思い出」だそうです。子供たちの幸福を目指す私たちは、子供たちの自ら伸びようとする力を大切にするとともに、温かな適切な指導・支援が重要だと思います。仙台市校長会皆さんの力を結集させ、子供たち一人一人の芽が、美しく咲き誇るよう祈っています。



## 「オール仙台 心は一つ」に

鶴谷 研（前 長町小学校）

校長に昇進した8年前、復興途上の仙台市小学校長会は翌年に指定都市仙台大会の開催を控えていた。何も分からないまま指定都市の事務局を任せられた私は「復興は教育の力で」を掲げ、日々忙しくもリーダーシップを発揮して学校経営にあたる先輩方に圧倒されるばかりであった。仙台大会への準備はもちろん、前年の札幌大会でも感謝とともに仙台から発信しようと皆、懸命であり復興に向けての強い絆と信頼関係が校長会に築かれていた。

来年度には震災10年を迎え、東北連小宮城大会を仙台市が主管して開催される。今後、校長先生方は大会に向けて総力を挙げて活躍されることであろう。「オール仙台 心は一つ」当時の合言葉をもう一度再現し、この機会を生かして互いの信頼関係を深めながら、各校で創意と活力にあふれる学校経営を展開していただきたい。いじめ問題をはじめ何かと守りの学校経営に陥りがちであるが、日々の学校経営に自信を持って取り組み、それを東北の皆さんに発信していただけたら幸いである。

地域社会では今も“学校”を温かく見守ってくださる方々が少なくない。私もその一人でありたい。

## 道半ば されど 悔い無し

白石 光彦（前 七郷小学校）

「できるようになったと子供が実感する授業」

「行くのが楽しみなままとまりと活力のある学級」

この2つは、子供の権利であり、学校の責務であると考え、学校経営の柱としてきた。

目指す授業・目指す学級を実現するため、時間を生み出し、教員が力を付ける機会を作り、教員が追い込まれることを防ぎ、明るく楽しい職場づくりを実現しようと取り組んだが、どれも道半ばであった。

怒とうの保護者対応や危機対応に、「明けない夜はない」と自分に言い聞かせ、それでも先が見えないときには「夜明け前が最も暗い」とつぶやいて出勤する激動の日々も少なくなかった。

なんとか校長の責務を務めることができたのは、子供たちのはじけるような、時に恥ずかしそうな笑顔と、懸命に子供たちと向き合い日々格闘する職員のかげな姿、そして懸命に支えてくれた教頭先生のおかげだとつくづく思う。百のため息が一瞬であったかいぬくもりに変わった。全校を背負っている校長だから味わえたのだと思う。

道半ばの思いだが、悔いは無い。一日一日これが精一杯であった。持てる力を出し尽くした結果だ。力足らずであったが、逃げたり諦めたりはなかった。

「できるようになったと実感する授業」「行くのが楽しみなままとまりと活力のある学級」の実現に、定年後再び一教師としてまい進できることに感謝。

## 東日本大震災の経験

福田 喜美恵（前 東長町小学校）

新米校長として、東日本大震災を経験しました。突然の激しい揺れが長く続いた、あの時。先の見通しが全く持てない状況で、校内放送も使用できず、どのタイミングでどのように子供たちを避難させたらよいのか、また、連絡方法もない中、子供たちを無事に保護者に引き渡すにはどうしたらよいのか、緊張感に押しつぶされそうでした。どのような時であっても、校長には瞬時に様々な判断が求められます。子供たちの安全・命を預かっているという重責を痛感したことは、今でも忘れられません。

もちろん、危機管理、その対応は、校長が一人で行えるものではありません。校長会のつながりからは、常に多くの適切な指針を得ることができました。教頭先生をはじめ教職員の協力は、心強いものです。また、保護者や地域の方々の支援からは、「地域とともに歩む学校」を実感することができ、大きな支えとなりました。「校長は孤独だ。」と言われることがあります、決してそうではないと思っています。

「子供のために」という共通認識の下、学校・保護者・地域が日頃から関係性の構築を図っておくことの必要性も改めて感じたことでした。

最後に、未来を切り開いていく子供たちの成長、そして、皆様の御活躍を大いに期待しております。お世話になりました。感謝の言葉しかありません。

## 出合いに感謝

小林 好美（前 国見小学校）

校長として初めて着任した日、1 通の FAX が届きました。それは、大先輩の校長先生からでした。昇任おめでとうの言葉に続き、4 月の職員会議の指示と入学式の式辞の原稿でした。文の一番最後には、あとはアレンジしてくださいのメッセージと困ったことがあったら、いつでも連絡してくださいの温かいお言葉でした。

「教職員が楽しくなければ、よい教育はできません」人と人との和・目的に向かって共に進む・分かち合う達成感。校長として職員の前に立ったあの日からずっと、大切にしていたありがたい FAX の言葉でした。

校長は経営計画達成のため、学校ビジョンと戦略を明確にし、教職員一人一人の自立性を大切にしながら特性や資質、能力を見だし、どのように生かしていくかを考えていくことになります。なかでも、「指示・命令」よりも「任せる」ことに、「教える」よりも「支援する」ことに、「話す」よりも「聴く」ことに重点を置いたコミュニケーションは教職員の意欲を引き出すためにも、大切なものだったと痛感しています。

今日の教育を取り巻く環境は、いじめや不登校の問題・学級崩壊、学力向上、学校の説明責任等、様々な課題が山積しています。教職員とのコミュニケーションを大切に、教職員一人一人の意欲を引き出し、思い描いた学校経営を推進していくことを願っています。

## 子供たちと共に

成瀬 秀治（前 宮城野小学校）

38 年間の教員生活、校長として 6 年。健康でいつも元気に子供たちと共に過ごすことができました。今は、親からいただいた頑丈な身体とお世話になった多くの皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

私は校長として、市内で当時最も小規模な（児童数 8 名）な坪沼小学校で統合までの 2 年間、宮城野

小学校で 4 年間を過ごしました。おかれている地域や学校規模は全く違いますが、そこで子供たちが学ぶこと、子供たちがいつも主役であることは変わりませんでした。私がいつも大切にしてきたことは、子供たちとの距離感です。坪沼小学校では、統合に向かう不安感をかかえる子供たちといつも共に過ごしていました。授業も担当し、休み時間と放課後は、一緒に遊ぶ日々でした。宮城野小学校では、できるだけ多くの子供たちに話しかけ、休み時間は校長室を子供たちに開放することもありました。校長という存在を身近に感じ、校長も含めた多くの先生方が見守ってくれている安心感子供たちに持ってほしいという思いがあったからです。そして、何より子供が大好きだからです。

今、学校はやるべきこと、課せられた課題が山積みです。多忙化の中でも、主役である子供たちとの時間を大切にしてほしいと願っております。

## ただ「感謝」あるのみ

高橋 淳（前 北仙台小学校）

新任校長として赴任した日、校長室の電話が鳴った。ドキドキしながら受話器を取ると先輩校長からの昇任祝いと励ましであった。そして、新任校長の心中を察したかのように、初めての入学式に向けたさりげないアドバイスもいただいた。被災地域に赴任し不安の中でのスタートであった。

新任校長研修会では、津波被害の跡が生々しい雄勝中・戸倉小を視察した。児童生徒の命を救った当時の校長先生の話は、今でも強烈な印象として心に残っている。危機管理ということを通して理解していても、自分が同じ状況に追い込まれたとき、教諭や教頭としてではなく組織のトップリーダーとしてどう決断し、行動できるか深く考えさせられた。同時に子供の命を預かる校長の職責の重さを改めて思い知らされた研修であった。

危機対応の根幹を支えるのは、マニュアルではなく人と人とのつながりであるとの思いを持って学校経営にあたってきた。校長としての 7 年間を振り返ったとき、児童や教職員に対しても、保護者や地域の方々に対しても「チームワーク」という言葉を

いつも発信し続けてきたように思う。

校長最後の年に、全学年で音楽の授業をすることができない、教える喜びを感じ、一人の小学校教師として終わることができたことに感謝したい。

## 出合いに感謝

佐藤 深雪（前 幸町小学校）

小学校入学から54年間途切れることなく『学校』に通い続けてきた。学校は私にとって職場で有り、常に学びの場であった。そこにはいつもすばらしい師がいた。あの人との出合いがなければ今の私はいないと思う師と幸運にも巡り会ってきた。

教師になろうと思わせてくれた師。教頭の仕事とは何かを示してくれた師。校長のだいご味をおしえてくれた師。

中でも今こうして校長で退職を迎えられるのは、管理職試験を受ける背中を押してくださったロールモデルともいえる校長先生のお陰だ。今でも私が書いた拙稿に「見たわよ。」と連絡をくださる。折々に励ましの言葉をくださる。人を育てるということは、こういうことなのだといつも体現してくださっている。これからは自分もと思いながら、不義理の限りを尽くしている。常に温かく見守っていることを伝えてこそ『人を育てる』ことになるのだと思う。

子供を育て、教頭を育て、職員を育てる。校長としてどれだけできたのか、はなはだ心許ない。今後更に若手が増える学校で、どう人を育てていくかは大きな課題であろう。ただ、この人に育ててもらったと思えるのは、いつも「勇気を与えてくれる師」だ。

## 新しい大和小に期待しながら

工藤 昌裕（前 大和小学校）

大和小の全面改築工事が進んでいます。児童数に対して敷地面積が狭いことや災害時の避難所として活用することを踏まえて計画を進めてきました。今年度末に仮設校舎へ引っ越し、新校舎供用まで2年が必要です。

その間、体育館やプールで行ってきた授業や行事は公共施設や民間の施設で実施することになります。

校庭を含む全施設の供用まではさらに1年が必要です。それまでは校庭で遊べない子供たちの体力を低下させない工夫が求められます。

仮設校舎が指定避難所。災害用物資は隣接する公園に備蓄。防災訓練の計画も大幅な見直しが必要になっています。

改築に伴う課題が山積している大和小学校ですが、一つ一つ解決しながら「やさしい子、まけない子、とくいな子」を育てていってほしいと思います。

3年後、体育館・プール一体型の明るい校舎に「大和の鐘」が鳴り響き、子供たちが元気よく校庭で遊んでいる姿を想像しながら、大和小の旧校舎に別れを告げ、教職人生にピリオドを打ちます。

これまで御指導をいただいた諸先輩方、たくさんの励ましをいただいた先生方、いつも支えてくださった先生方、お世話になった地域の皆様、ありがとうございました。心から感謝申し上げます。

## 「和をもって学校経営を進めたい!」

早坂 忠好（前 金剛沢小学校）

教員生活に区切りをつける時がきました。振り返ると無我夢中の38年間だったような気がします。この間、多くの先輩の先生方、同僚に恵まれ、育てていただき、助けていただきました。貴重な助言、お話もたくさんいただいた中、なぜか新任1年目、4月第1回職員会議で当時の校長先生が話された運営方針の一言が未だに記憶に残っています。

「和をもって学校経営を進めたい!」

この一言は教頭時代、校長時代、仕事を進めて行く上での私のめあてとなりました。立場によっては見過ごせないこと、妥協できないこともあります、学校運営の根底に職員の、職員室の「和」がなければ事は進みません。

私は、金剛沢小学校赴任以来2つ加えて、「3つのわ」を大切にして学校運営を進めたいと話してきました。「和」、「輪」、「環」、3つの漢字に込めた私の思いを恥ずかしながら学校運営に当たられる校長



先生方に贈りたいと思います。

最後に、課題山積の現場において日々精励されておられる校長先生方の活躍を御祈念申し上げます。お世話になりました。

## これからの学校

古山 洋一（前 蒲町小学校）

現在、学校経営がうまくいっているところは、概して一つの目標に向かってそれぞれの仕事繋がり協力体制が築かれていると考えます。このことは、円滑な経営のためには“個人から組織で動く”ということが重要になるということを示唆していると考えます。また、前年踏襲型の学校運営を続けていると、学校全体の問題として解決していくことがなかなかできないようです。

このためには、現状をしっかりと把握した上で、課題を共有化し学校全体のレベルに引き上げることによって、これまでの仕組みやシステムを変えていくことが大切であると考えます。日々の仕事をこなしていくだけでも相当な時間が必要で、1年間それに追われていると「毎日が本当に忙しかった」という感想だけが残る、学校改革はあまり進まないということになりかねません。

しかし、今学校を取り巻く環境も大きく変わり、教育をめぐる課題も山積しており、まさに新しい学校づくりが求められています。そのためには校長が強いリーダーシップを発揮していかなければなりません。日々の仕事に忙殺されているだけではなく、教育の充実のための学校改革を進め、経営の枠組みをつくるという気で取り組んでいくことが重要であると考えます。皆様の御活躍を願っております。

## 人をつなぐ仕事が面白い

菊地 和則（前 枳江小学校）

校長の仕事は営業の第一線、そう思って7年を過ごしました。校内では人事部長であり、社長でありという立場ですが、職員を勇気付け、刺激を与えてくれる多くの人材を学校に招いて、学校全体を活性

化させるには、校長が営業に徹するのが一番だと実感しました。

東日本大震災のときは教頭職でした。勤務地は地域づくりがしっかりとされていたので、なんでも地域の方と相談し、協力をいただいて進めることができ、教頭としての苦労はありませんでした。しかし、地域づくりがされていない地域の学校では、職員は大変な苦労を強いられました。地域がしっかりしていないと、学校の負担は非常に大きくなるのです。災害時だけでなく、学校支援地域本部の支援を得て地域の方々や外部講師などと連携し、職員が広い視野を持って子供たちに向き合うように支えるのが、校長の一番の仕事だと思います。職員も管理職や地域の方々、多くのすばらしい方々に見守られていることで、どんどん成長する姿を見てきました。

学校は、教員だけでなく様々な職種の職員が集まっています。その全体を見渡しつつ、どの職員も大きく意欲も技能も高めていくような環境づくりには、それぞれをつないで広げていくことが大切だと思います。皆さんの活躍を期待します。

## 学校の主役の子供を指導する 教職員の笑顔

二階堂 裕（前 西中田小学校）

校長として心がけた一番の事は、学校の主役の子供を指導する教職員が、時間と心にゆとりをもって子供たちに丁寧に指導したり、触れあったり、日々の授業の教材研究の時間が十分とれるようにする学校運営を行うことでした。以下が拙な方策です。

### ① 「何でもかんでも行わない」

学校経営方針に基づき、スクラップ&ビルドで教育課程を編成しました。前年踏襲ではなく、全部いったんなくし（スクラップ）、今年はこの方針なのでこうします（ビルド）というふうにしました。

### ② 「子供と一緒にいよう」

大先輩から、「職員室の黒板と週予定を見れば予定や動静わかるべ。」「なるべく子供と一緒にいよう。」と言われました。職員会議は年6～7回、打合せは週1回（学年1人以上参加）、主に校務支援システム（掲示板や会議室）で情報を共有しました。

### ③ 「学校の目標は子供でも分かり、評価しやすいよ

うに具体的に」

コミュニケーション意欲と運動意欲と学習意欲の醸成を重点目標とし、○挨拶じゃんけん 1 日 5 回以上勝つ○1 日 1 粒の汗○授業発表 1 日 2 回以上。

※他にも諸先輩方に御指導いただいたこと。「教育は人なり」「昨日の常識は今日の非常識」「研究授業より日頃の授業」「教育改革は教室の前で止まる」

## 校長としての 1 年目

中林 和雄（前 東宮城野小学校）

私が校長となった時、これまでにお仕えした校長先生のようにになりたい、同じような学校経営や取組をしてみたいと思いました。しかし、それは、間違いでした。同じようなことをしても、それは形だけであって意味のないものでした。

赴任した学校の「子供たち 先生方 保護者 地域の方々」と向き合った中で、どんな取組がよいのかを考えなければ、意味がないことに気がきました。

そして、取組には、校長としての自分らしさや自分の強みを生かしていくことが、その学校に赴任して校長として学校経営を任せられた責任だと思うようになりました。

東宮城野小学校は小規模校でした。小規模校だからこそできる学校経営があり、子供たちや教職員、保護者、地域の方々との関わり方があります。小規模校において一番の強みは、校長と子供たち、教職員との距離感にありました。みんなのことは見ることができ、声を聞くことができる。それを生かすようにしました。

子供たちや先生方、職員の声が聞こえてくる学校（職場）、声を聞く校長を目指して、学校経営を行っていきました。

最後になりましたが、校長会の皆様の御健勝と御活躍を心よりお祈りいたします。

## ただただ感謝です

中村 昌人（前 南光台小学校）

これまで、多くの上司や諸先輩の御指導や御助言

をいただいたことや同僚・保護者・地域の皆様からの温かい御支援に対して心より御礼申し上げます。とりわけ、仙台市小学校長会並びに各校長先生方には大変お世話になりました。

今般、退職にあたり「後輩に期待すること」との難しいテーマを頂戴しましたが、まずもって感謝の気持ちでいっぱいです。むしろ期待することではなく、自分ができなかったこと、後悔していることの幾つかを記したいと思います。

学校の敷地内には多くの樹木があり、まさに緑豊かな学び舎でしたが、季節ごとに彩られるプランターや花壇の花と子供たちの笑顔を学校だけでなく、地域に広げていくことが願いでした。また、新しい校庭には遊具を多く設置することができないものでした。遊具は、その機能と子供に与える効果が 6 つの系統に分類されますが、全て網羅するまでには至りませんでした。

校内研修では、職員の得意分野を生かして、道徳や外国語活動について取り組むことができましたが、多くの校長先生方に甘えて講師依頼をすれば、研修をさらに深められたと後悔しています。

今後は、得意なことを生かして学びや交流を広げていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いします。

## 新時代でも大切にしていきたい思い

中廣 治（前 将監小学校）

平成の幕を閉じる新時代。この 30 年の間に教育改革が進み、学校の在り方、求められることについて議論が進み大きな変革期の時代であったと振り返っています。学校現場は課題が山積しています。しかし教育活動の中で対応しなければいけないのが学校です。「良働通心」初任の時に恩師からいただいた言葉です。今でも常に心に留め、自分のモットーとして校務にあたってきました。心を通じ合わせることで良い仕事ができる。よりよい学校づくりのため「子供も教師も楽しく過ごせる学校」。校長になってもその思いは大切にしてきました。震災時には皆で子供たちを守り、学校再開に向けて一致団結し、再び子供たちの歓声が響く学校を取り戻したい、皆の

共通の思いがあって乗り越えられたと、今も確信しています。本来学校は楽しいところ。多様な経験を通して人として成長させてくれる場。そして我々教師自身も同僚と共に生き生き仕事ができる場。最近では「いじめ・不登校」「学力低下」など対応すべき事象が次々と押し寄せ、今後は英語活動やプログラミング教育。時代を反映しての取組ではありますが、「不易と流行」。新時代の教育が迫っていますが、職員も子供たちも笑顔が広がる、「温かい学校づくり」ということを学校経営の基盤にして、皆で多様な課題に立ち向かってほしいと願っています。

## この地域の中で

小原 純（前 高森小学校）

高森小学校に赴任して早 2 年が経過しようとしております。この 2 年間は落ち着いた雰囲気のある高森地区に守られて、信頼・協力できる教職員に囲まれて本当に恵まれた時間を有意義に過ごすことができました。

高森地区は東日本大震災後に、地域が立ち上がり、学校と協力して沈みがちだった気持ちを明るくしようといういろいろな取組を行いました。そこにあったものは「地域愛」だと思いました。そこで本校では地域愛を「チーム学校」として置き換え、教職員が子供たちのために何ができるのか。何を求めていけばいいのかを全員で知恵を出し合い、2 年間取り組んできました。校長としては、一人一人の教職員にとって働きがいがあり、お互いが認め合える環境作りを推進していくことの大切さでした。

これからの学校を取り巻く環境は厳しいものになっていくと思われますが、お体を大切にしてくださいと思います。

結びになりますが、たくさんの諸先輩方、同僚の皆さんに支えていただきながら、何とか務めることができました。心より感謝申し上げます。

## 目指す子供像に重ねて

曾根 由美子（前 泉ヶ丘小学校）

「えがおで」「ゆたかに」「元気よく」泉ヶ丘小学校の目指す子供像です。今日も、地域の方々が学校に足を運び、様々な支援をしてくださっています。

当たり前のことが、当たり前でなくなったとき、その存在の大きさに気づきました。大きな震災を経験した私たちは、誰しものが心に止め、次の世代へ繋いでいかなければという思いで、教育活動に当たっています。学校を支えてくださる、地域力の大きさと有り難さを、子供の姿を通して感じてきました。

「子供たちから元気をもらっています。」「学校に関われることが、励みになり楽しみでもあるのです。」

地域の方々皆さんがおっしゃる言葉です。「また来てくださいね。」「ありがとうございます。」子供からも感謝の言葉が飛び交います。うれしい時間です。

意見を出し合い・高め合い、互いを大切にしながら、子供たちは成長します。組織で向き合い、職員みんなが同じ思いで関わってこそ、子供たちはたくさんの笑顔を見せ、元気な挨拶を交わします。

職員の笑顔と元気こそが、子供たちへの何よりの贈り物であり、私たちにとっても活力となるのです。多忙な毎日を送りながらも、自分自身が元気で豊かになれるような時間を、ぜひ生み出していきたいものです。

## 明日も、明後日も

石田 裕子（前 館小学校）

「先生、お疲れ様だったね」という突然の電話。

県北の初任校でお世話になった当時の教務主任の先生からでした。80歳を越えているとのことでしたが、その声は当時のまま。一気にあの頃の気持ちと記憶がよみがえってきました。現在のようなフレッシュ研修のない時代でしたが、この先生からは、幾度となく「学校は子供たちのためにあるんだからね」という話をされました。この言葉は、私の38年間の教員生活を支えるものとなりました。



校長となり、子供が「明日も行きたい」と思える学校を目指して学校経営に取り組んできました。悩んだ時、迷った時は、常に「子供のためになるか」を考え決断してきました。時には、先生方に大きな負担を強いることもあったかもしれませんが、その都度、この言葉の意味を先生方にも伝えてきたつもりです。子供のために最善を尽くす学校は、明日も明後日も行きたい学校（子供も、そして教師も）になるはずです。

今後は、これまでとは違う立場で、学校、そして子供たちの力になればと思っています。

最後になりましたが、仙台市校長会のますますの御発展と、校長先方の御活躍を心からお祈りいたします。

## リーダーとは

阿部 恭太（前 市名坂小学校）

2月も半ばを過ぎ、退職まであと1か月とちょっとという時、一人の3年生児童が保健室で養護教諭になにやら不満ありげに話をしていた。インフルエンザも流行ってきて具合の悪い子供がベッドで休んでいるので、校長室に引き話を聞いてみた。

数人の子供で班を作り調べ学習をしたあと発表をする段階になった。発表をするとき誰がどの部分をというところで希望が重なり誰も譲ろうとしない。自分は班のリーダーで皆に命令をできる立場なのに誰も言うことを聞いてくれない。文句を言うばかりで困ってしまうということが主訴。そこで、リーダーとは人がいやがることを率先してやること、また皆のために我慢して、やりやすいことを仲間に譲り、最後に残った誰もがいやがることをリーダーはするもの。そんな役目がリーダーなのだと話して聞かせた。まるで自分に言い聞かせるように、そして自分はそうしてきたかと自問自答しながら。そこまで話してきて、その子供は大分落ち着いてきたように見えた。でも、その後の言葉は「じゃあ、副リーダーになればよかった」。そうきたか！？。校長の苦労はなかなか理解してはもらえません。副リーダーになることもできません。教職員のために学校のために校長は皆がいやがることをやり続けなけれ

ばなりません。それでも校長にはやりがいや喜びといった校長でなければ味わえない魅力があるのだと思います。

## 感謝

佐藤 智則（前 富沢小学校）

「げんき」「えがお」「かんしゃ」をキーワードに据えて学校経営を行ってきた。どんな時でも大切にしたいこと、伝えていきたいこと。それは、私の場合、「ありがとう」という感謝の気持ち。職員に、児童に、保護者に、そして地域の皆様をはじめ関わっていただいたすべての皆様方に対して、感謝の気持ちを伝えてきたつもりである。未曾有の大震災から流れた8年余りの歳月。感謝の気持ちがあれば、人は大体のことは乗り切れることを学んだ。

学校としての「チーム力」をいかにして育むか。「ありがとう」という一言がきっかけで人と人とが繋がっていく。そのことだけを大事にしてきた。ごく普通のことの繰り返し。人が繋がりますと面白い。それぞれの人が持つ得意技は千差万別。ここは、校長としての腕の見せ所。コーディネート。自分を含めて、学校の中にそれぞれの居場所があった。

退職の日を迎え、感慨深いものがある。34年間の教員生活。多くの児童、保護者、地域の方、教職員との出会いがあり、言葉に言い尽くせないほど助けられ、諸先輩方に背中を押してもらったり、寄り添っていただいたり様々なことを学ばせていただいたりしながら何とか教員生活を終えることが出来た。これまでお世話になり、支えていただいたすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



## 新任校長所感

## 学 校 経 営 に 寄 せ る 思 い



## 地域力を生かして

茂泉 和浩（金剛沢小学校）

金剛沢小学校に着任して3か月が経ちました。まだ短い期間ではありますが、学校や地域のために力を尽くしてくださる方々の想いに触れる日々でした。子供たちの安全のために毎朝交差点に立っていただいているボランティアの方々、より良い地域環境の中で子供たちに育ってほしいと天沼の清掃活動を行っている方々、子供たちの情操教育のためにと読み聞かせを行ってくださっている方々等、多くの団体が子供たちを中心に据え活動を行っていただいています。

学校経営は、そういった方々の想いをくみ、力を借りながら行っていくことが大切だと考えています。本校の協働型学校評価目標は、「楽しく確かに共に学ぶ児童の育成」です。今年度、「共に」という言葉を付け加えました。教員の力、地域の力を結集して児童の教育にあたっていきたいという願いからです。「たしかなゆくて」という本校の校歌にあるように、子供たちの将来の自律を見据え、地域ぐるみで学校経営を行っていく所存です。

## 教育の原点を見つめて

柴田 真理子（馬場小学校）

「大東岳が白いうちは、まだ寒いんだ。」と、4月最初に地域の方に教えられました。そんな雪をまとっていた大東岳も青い山となりました。窓から見える空の青、山の緑はとても美しく、心が澄み渡り、大きく広がっていくような気がします。

馬場小学校への異動が決まると、たくさんの人から口々に「馬場はいいよ。」と、声を掛けられました。私自身、初任の頃分校に勤めた経験があり、で

きればまた小規模校に勤務したい思いがあったので、本校への着任は大変うれしいものでした。着任してから、様々な面で『教育の原点』を見る思いがしています。教育で大事にすべきことは何なのかを、私自身に改めて問いかけ気付かせてくれます。小さい学校なので、校長も補欠に入り授業をします。授業力を磨き、子供たちに負けないように学び続けていこうと思っています。木がふんだんに使われた温かみのある自慢の校舎で、子供たちや先生方と共に、地域の方々の思いを大切にしながら、馬場小学校ならではの教育・学校経営を行ってまいります。

## ～光を未来へ～

平山 勝（南吉成小学校）

開校29年目の南吉成小学校に、23年ぶりに着任して3か月。学校をしっかりと「把握」することと併せて、いじめ防止基本方針の策定や働き方改革「数値目標」達成に向けた取組、さらに新学習指導要領の完全実施に向けた準備をどのように進めるかに苦心する毎日です。特に、職員一人一人の力を活かしながら、スクラップ&ビルドの発想で教育課程の見直しを行い、子供と向き合う時間を確保する方策をいかに具現化していくかについては、もう少し試行を繰り返していかなければなりません。

それでも、保護者や地域の皆様が、学校を力強く支えてくれていることは、得がたい「財産」と感謝しています。なにより、挨拶や話の聞き方がすばらしく、学習に真剣に取り組んでいる子供たちの存在は「宝物」です。

～光を未来へ～は、本校校歌のサブタイトルです。子供たち一人一人が、未来を照らす光となれるように、確かな成長の手助けができることを、校長としての大きな喜びとしたいと思います。

## 変革期の新任校長として

島村 信義（北仙台小学校）

仙台市の中心部にありながら、隣接する水の森公園からは小鳥のさえずりが聞こえてくる北仙台小学校に着任し、2 か月余りが過ぎました。子供たちの歓声で沸き返る校庭を眺め、一人一人を6年間守り育てていく重責に身の引き締まる思いです。

本校の特色である学校支援地域本部「りえぞん北仙台」との連携や、子供たちが学年の枠を越えて温かくつながり合う「たてわり活動」を軸に、日々の学校経営に取り組んでいるところです。

新学習指導要領の完全実施を来春に控え、学校教育は大きく変わろうとしています。また、教員の働き方改革についても、待ったなしの取組が求められています。この変革の時期に学校を運営していくには、指針を明確化し「変わる意味と変える意義」を伝える力が不可欠と考えていますが、新任校長としてまだまだ力不足を痛感させられる毎日です。全ての教職員が同じ目標に向かって教育活動を推進できるよう、自己研鑽と職場の人間関係づくりに日々努めていきたいと考えています。

## 感謝の思いを原動力として

阪元 容昌（桜丘小学校）

「ありがとう」「いいね」「ナイス」「幸せだ」校内の階段には、このような「ぽかぽか言葉」のカードが貼ってあります。私自身、これらの言葉に励まされながら階段を上ります。

本校では、「ぽかぽか言葉」の掲示の他に、委員会活動を中心として、児童の主体的ないじめ防止対策に関する取組が展開されています。例えば、放送委員会は、自分たちの言葉で、いじめ防止を呼びかけています。図書委員会は、命や友達を考える本を借りると手作りのしおりをプレゼントしています。

これらの児童の主体的な活動は、教職員の意図的・計画的な指導や支援の積み重ねによって生まれたものです。

いじめ防止対策の取組だけでなく、児童や教職員の思いや願いの強さを感じたとき、うれしさと感謝の気持ちで満たされます。

だからこそ、校長として、児童にとって楽しく、

教職員にとって働きがいのある、安全・安心な環境づくりに精一杯努力してまいりたいと思います。

## 笑顔あふれるみんなの学校

鳩原 淳子（鶴谷小学校）

学校前のバス通りに咲くハクモクレンの白い花は、鶴ヶ谷のまちに春を告げる風物詩です。その白い花に見守られながら歴史と伝統を築いてきた鶴谷小学校は、来年50周年の節目の年を迎えます。昭和49年に設置された観察池は、見事なビオトープとなり、その周りには水生生物と触れ合う明るい子供たちの声が響いています。また、自慢の広い校庭には、毎日元気に伸び伸びと遊ぶ子供たちの姿が見られます。子供たちの明るい笑顔が何よりの宝であることを実感する毎日です。

本校では、「笑顔あふれるみんなの学校」をスローガンとして、学校・家庭・地域が一丸となった取組を推進しています。登下校時の見守りや学校支援地域本部の活動は、学校を支えていただく大きな力です。震災の教訓や記憶の風化が懸念される中、地域とのつながりや人との関わりは重要であると考えます。未来に向かって心豊かにたくましく生きる児童の育成を目指し、人との関わりを大切にしながら学校経営に取り組んでまいりたいと考えています。

## 子供たちの力を地域の力に

武田 早苗（柊江小学校）

着任から約3か月が経ち、まだまだ手探りではありますが、校長としての使命をどのようにして果たしていくかを考え、今できるところから少しずつ進めています。同時に、重責を負いながら学校を運営していくことの大変さを痛感しているところです。駆け出し校長の私にとって、同地区の校長先生方をはじめ校長会の諸先生方からいただく懇切丁寧な御指導や温かい励ましの言葉は、本当に有り難く、勇気と元気をいただいております。

本校は街中にありながらも自然豊かな場所に位置しており、近くに与平衛沼を望むことができます。与平衛沼は四季折々の変化が楽しめる地域自慢の場所です。しかし、大雨が降った場合には洪水を起こす心配もあり、地域では緊急時の対応について話し



合いが重ねられています。学校では子供たちに地域の  
の一員としての意識を育み、命の大切さや身を守る  
方法をしっかりと指導していくことが重要と考えま  
す。将来、子供たちが地域の力となれるよう、家  
庭・地域と絆を深めて教育に当たりたいと思います。

## 岡田の三本松のもとで……

阿部 謙（岡田小学校）

「昨日、2 年生ぐらゐの男の子が、歩道の段差で困っ  
ているおばあちゃんを助けていました。その姿があ  
まりにも自然で、感動したので電話しました。」

岡田では、毎朝、たくさんの地域の方々が、子供  
たちの登校を見守ってくれています。そんな中で育  
つと、子供たちはこんなに真っ直ぐ育つんだなあと  
感心しています。

今ある市内唯一の被災小学校です。8 年経っても  
子供たちの心のケアを欠かすことはできません。そ  
れでも、関係機関と連携しながら、「花咲く浜辺復  
興プロジェクト」として、津波で植物が失われた浜  
辺に、ハマヒルガオなどの植物を植えています。こ  
れまでの取組は、11 月に行われる「なぎさシンポジ  
ウム全国大会」にて、6 年生が発表をする予定です。

また、かさ上げ道路の工事で発見された「埋もれ  
木」を使って、校名版を作る活動も行っています。

津波に耐えたシンボル三本松のもと、子供たちに  
寄り添いながら、自分たちの手で、地域を復興させ  
ていく姿を大切にしていきたいと思っています。

## 校章に込められた願い

高橋 義肖（鶴巻小学校）

着任してすぐ、校長室の書棚を確認していたところ、  
校旗制定時の資料を見付けました。校章考案者  
の中のお一人は、教師 1 年目に講師として勤めた学  
校でお世話になった校長と分かり、何かしら縁を感じ  
ました。

校章は、近隣三校から集まった子供たちを表す、  
大きな輪（和）をつくる三羽の鶴がデザインされて  
います。鶴には「自ら学び（知）、思いやりがあり  
（徳）、たくましい（体）」子供になってほしいとい  
う、鶴巻の人々の願いが込められています。今でも  
その願いは受け継がれ、多くの地域の皆様に学校へ

お力添えをいただいております。

校章に込められた願いは、教職員の願いでもあり  
ます。本校は、「子供が本気になって取り組み、笑  
顔あふれる鶴巻小」をスローガンとしていますが、  
その具現のためには、地域、保護者、学校が協働で  
学校経営を進めていくことが必要だと考えます。校  
長として、その中心となって取り組んでいくことが  
できるよう、自己研鑽に努めていきたいと思っています。

## 新任校長としての抱負

青木 敏彦（東宮城野小学校）

4 月 1 日に新任校長として本校に着任しました  
が、はじめは「教頭先生」という言葉に反応してい  
る自分があり、校長としての実感がなかなか持てな  
い状況でした。しかし、始業式、入学式が近づくに  
つれて挨拶文や式辞づくり、年度初めの大量の文書  
を処理し、職印を押す中で、校長としての責任の重  
さを徐々に実感してきました。

本校は、全学年単学級の小規模校ですが、私個人  
としては、程よい人数で、子供たち一人一人としっ  
かり関われるという認識があります。まず校長とし  
て一番力を入れていきたいことは、「人とよりよく関  
わる力」を育て、子供たちのコミュニケーション能  
力を高めることです。また、職員の「和」を大切に  
し、組織力も高めていきたいと考えます。

今後は、「子供たちの笑顔あふれる東宮城野小学  
校」を目指し、自分自身が心に余裕を持ち、笑顔で  
子供たちや先生方、保護者や地域みなさんと接し  
ながら、広い視野で学校経営に当たっていきたく  
と考えています。

## 校長先生のお仕事

我妻 良行（八本松小学校）

4 月に広瀬川の土手を歩いてみました。ゆったり  
流れる清流、広々とした河川敷公園、遠くから聞こ  
える小鳥のさえずり、すばらしい環境の中で子供た  
ちが育っていることを実感しました。

八本松小学校は、昨年度、開校 50 周年を迎えまし  
た。校舎に沿って流れる広瀬川での活動が特色で、  
水生生物の観察や水質調べなどの環境学習だけでな  
く、持久走や風揚げ、そり遊びなど、四季を通じた

学びの場になっています。地域の方々の御協力も絶大で、二人のスーパーバイザーを核にした学校支援地域本部によるボランティアは、延べ千名に届くところまでできました。

豊かな自然と温かい地域の方々に見守られながら、新任校長としての3か月が過ぎますが、学校探検で校長室を訪れた1年生に、「校長先生のお仕事は何ですか？」と聞かれた際、明確な答えを返すことができませんでした。正解を見つけることができるよう、日々取り組んでいきたいと思います。

## 学校の強みを生かして

有馬 玄康（東四郎丸小学校）

東四郎丸小学校の強みは「全職員でよってたかって子供を育てる」ことです。担任はもちろん、担任以外の職員もそれぞれの立場で子供に寄り添い、温かく見守りながら、子供の自立や成長を支えています。また、開校当初から地域の皆様の学校に対する思いは強く、とても協力的です。

本校では、それらの強みを大切にしながら「笑顔あふれる楽しい学校」をスローガンに、様々な教育活動に取り組んでいます。今年度は、特に異年齢集団による交流や地域住民との交流に重点を置き、自己有用感の育成を目指しています。この、相手の存在なしには生まれてこない感情を育むことを通して、子供たちには「人とかかわる楽しさ」を存分に

味わわせたいと考えています。

まだまだ日々の仕事に追われ、先を見通すことが難しい状況ですが、子供たちのよりよい姿の実現のため、家庭や地域の皆様とともに、職員一丸となって力を発揮していくことができるよう、学校経営に取り組んでいきます。

## 夢に向かって西中田

浅野 裕一（西中田小学校）

西中田小学校に着任して3か月。毎朝校門で、元気な挨拶と笑顔いっぱいの子供たちに力をもらい一日をスタートしています。

校舎に入っていく子供たちを見ながら、今日もこの子供たちの安心・安全を守ってあげなければならないと、日々心新たにしています。

本校の校歌にある『風に向かって あふれる力 夢さわやかな 西中田』のように、夢に向かって努力し、輝きを放ちながら、力強く歩み続ける子供たちを育てていきたいと思います。

また、本校の強みである学校と地域の連携は、教育活動を推進していく上で、本当に力強く頼もしい存在となっています。地域・家庭・学校が、子供を真ん中において、皆で手を携え育むことが子供たちの健やかな成長につながると信じ、これからも力を尽くしていきたいと思います。

## 編集後記

平成から令和に時代が移り変わった今年も、仙台市内の小中学生の折った八万八千羽の折り鶴が、仙台七夕に一層の彩りを添えています。

さて、この度は、会員の皆様の御協力により、「廣瀬川」第96号を刊行することができました。本号では、「防災対応力を向上させるための取組をとおり未来を切り拓く児童を育む学校経営」というテーマに、地域とともに、特色ある教育活動や心豊かでたくましく生きる子供の育成に取り組んでいる学校の具体的な実践を御紹介いただきました。

また、今春退職された25名の皆様方からは示唆に富んだお言葉や心強いメッセージをお寄せいただくとともに、13名の新任の皆様方からは、学校経営に対する決意や熱い思いを寄せていただきました。

本号が、仙台市が目指す「時代の変化を受けとめ、未来を切り開いていく力」に満ちた子供を育てることに資する学校経営の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、御多用の中、玉稿を賜りました皆様方に心から感謝を申し上げます。

(96号チーフ 目黒 記)

編集担当者：目黒 悟（七郷小） 三浦 敏光（向山小）

大森喜美子（川前小） 船山 雅和（高森東小）